

論文審査結果の要旨

氏名 青山由美子

本論文の対象となっている 11～12 世紀のフランドル伯領は、英独仏の三強国に囲まれながら、独立を維持した領邦であった。フランドル伯が、それらの王国に併合されることなく、独立を維持することのできた最大の要因の一つは、高度に発達した行財政制度であったと考えられている。本論文は、この行財政制度の中核をなす尚書部の実態を解明しようとしたものである。

ベルギーの研究者たちは、尚書部の発達の延長線上に近代的官僚制を見ようとしてきたために、その関心は尚書部の最盛期である 12 世紀後半に集中し、それ以前の時期にはあまり注意が向けられてこなかった。そして、11～12 世紀の尚書部については、最上位役人が下位役人たちを率いる単純な 2 層のピラミッド型構造を有し、その基本的枠組みを変えることなく、役人や役職の数が増加し、自立性を強め、12 世紀後半の最盛期を迎えたと考えられてきた。

著者は、このようなベルギーの研究者たちの理解に異議を唱え、以下のような新しい説を提示した。まず第一に、尚書部の人的構成は、第 1 期には 2 層のピラミッド型、第 2 期後半にはブルッヘ以外のプレポジトゥスが中間役人を務める 3 層構造、第 3 期後半には最上位役人に直属する秘書官が中間役人を務める 3 層構造、そして第 4 期にはひょうたん型と、4 段階を経て変化していったことである。第二に、尚書部の主要業務が、通説で考えられてきたような証書発給に限定されていたわけではなく、財務や統治を支えるための他の業務も行ってきた、というものである。

ラテン語証書史料の網羅的な検討、尚書部役人の人的構成の詳細な検討は、著者の議論を説得的なものとしており、通説の修正に成功した論文と判断される。

史料に関する説明が不足しているため、残存史料の全体像が見えにくいという欠点、また、フランドル伯以外の尚書部との比較が不十分であるため、その特性がつかみきれていないという欠点はあるが、先行研究を踏まえた上で、年代記や証書など多くの一次史料に基づいてなされた議論は、博士論文として十分満足できる水準に達しており、歴史研究者として今後の実り多き研究生活を期待させるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。